

## 文学博士前田惠學君の「原始佛教聖典の成立史研究」に対する授賞審査

### 要旨

前田惠學君は多年パーリ語仏教聖典をその成立史の観点から精査し、特に古来行なわれた九分十二分教——仏陀の教説を形式と内容とに即して分類したもの——の問題に専念し、その主要な支分の意義内容に関する幾多の論文によつて学界の注目をひいてきたが、今これらの研究を集大成し、本書の中にその全貌を提示した。

本書は序論・総結のほか、本論三篇からなり、最後に附説として、「セイロンにおける仏教の伝承——特に But-dhaghosa について——」が添えられている。序論は「原始仏教と原始仏教聖典」(一一—二頁)と題し、これら兩概念を規定する。仏滅後約百年、上座・大衆の二部に分裂した時までを原始仏教と呼び、別に根本仏教の名を立てない。ただし原始仏教を前期と後期とに分け、資料の古層・新層に呼応するものとする。原始仏教を伝える研究資料は広汎にわたるが、いわゆる小乗二十部の中、その聖典を完存するのは、パーリ語によるセイロン上座部のそれのみであるから、これが成立・伝承の究明は、仏教研究の重要課題となる。

第一編「仏陀の用いた言語とパーリ語の故郷——その教団史的考察——」(二三—一七八頁)において、前田君はパーリ語の言語的特徴に基づき、その本源を西インドに求める説を支持する。仏教の流布に伴い、西印教団の勢力が伸張した過程を歴史的に考察して、その主張の裏づけとしている。他方これとは別個の問題として、仏陀行化の地域を文献に徴して精密に限定し、仏陀は公的な会合・説法等において、恐らくマガダ語を基礎とする東部方言を用いたも

のと認め、聖典最古の言語は古代マガダ語に求められると結論している。

第二編は「四部四阿含成立以前の聖典の形態——九分十二分教とパリヤーヤ——」（一八一—五四九頁）と題して、本書の中核を形成し、前田君の最も力を注いだ部分である。九分十二分教（以下分教と略す）とは、いわば聖典文学のジャンルに相当し、前述のごとく、仏所説の教法を形式と内容との両面から分類したものである。原始仏教聖典の素材を探求し、四部四阿含（以下四部と略す）成立以前の聖典の様相を推定するためには、分教の基本的性格を明らかにすることが先決問題となる。前田君は各支につき、その一般的語義と分教の支分としての伝統的解釈とを検討し、現存経律への比定に関する諸説を批判して、独自の見地から解決を提唱している。膨大な文献を涉猟・整理し、穩健明快に論旨を進めるところに前田君の本領が最もよく發揮されている。しかしこれを詳述するいとまはないから、ここにはただ各支の名を列挙し、前田君の意を汲んで本来の意味を添えるにとどめる。一、sutta (sūtra) 法（律を含む）の内容を簡略にまとめた散文。二、seyya (geya) 散文・韻文による sutta の摘要反復。三、veyyakaraṇa (vyākaraṇa) 問答体。四、pāṭha 偈文。五、udāna 憂喜の感懐によつて仏陀の発した言葉。六、itivuttaka (ityuttaka, itivuttaka) 上記 seyya のうち法数に関係があるもの。七、jātaka 仏陀前生の修行時代の物語。八、vedalla (vaipulya) 下輩者が長上者に対して重層的に繰返す教理問答。九、adbhuta dhamma (adbhuta dhama) 希有な事に関する経。以下十二分教にのみ見える三支。一〇、nidāna 因縁物語。一一、avadāna 教訓譬喻譚。一二、upadeśa 仏説に対する大弟子の広分別。

前田君はこれらの支分の発達を次の三段階に配当し、最初に第一—第五支を、次に第六—第九支を、最後に第一〇

―第一二支を置く。ただし十二分教の成立も相当に古く、必ずしも四部より後とは断じ得ないとしている。いずれにせよ、資料に新古の層を識別し得ることは重要で、ここに原始仏教史を構成する可能性が生まれる。最後に分教以外の聖典様式たるパリヤーヤ (pariyaya) を詳説し、その性格を散文の教理要綱と定義している。

第三編「原始仏教聖典各部原形の成立」(五五一―七八四頁) は分教等の古い素材を基礎として、各部各経の原形が成立した過程を論述する。諸般の伝承、史実を綿密に調査しつつ、四部の成立を考察してその原形の推定に努め、最後に小部を構成する諸経典に検討を加えている。小部は最初法句経 (Dhammapada) の原形等で形成され、アソーカ王の時代にはほぼ成立していたと思われるが、後に数次の広増を経て現形に到達したものであるという。前田君に従えば、経律二藏と全五部の成立は西暦前二世紀以前にさかのぼる。

分教を中心とする聖典史に心血を傾注し、かくも大規模な著作を発表した例はいまだかつてない。しかも博搜深探、立論は中正を得て精密、論旨は批判的にして明白、資料の取捨は適切で、独創的見解に富む。細部にわたってはなお今後の補足修正にまつところがあるとしても、この問題に関する限り、将来長く基本的研究の地位を保持するものと信ずる。

#### 主要論文目録

- 一、パリリ小部の原形とその発達、印度学仏教学研究 (以下印仏研と略す) 一 (一九五三)。
- 二、パリリ語の故郷と原始仏教教団の発達、東方学 六 (一九五三)。
- 三、四部四阿含原形成立の先後に関する二、三の問題、印仏研 二 (一九五三)。

- 四、九分教スッタの具体的内容比定の問題、印仏研 二（一九五四）。
- 五、九分教のゲーヤについて、印仏研 三（一九五四）。
- 六、九分教ヴェーダツラの原意とヴァイプルヤの解釈、宮本教授記念論文集（一九五四）。
- 七、原始仏教教団發展史上における大迦旃延の位置、印仏研 三（一九五五）。
- 八、九分教のヴェイヤーカーナについて、宗教学研究 一四四（一九五五）。
- 九、パリ聖典に見られるパリヤーヤの性格とその種々相、仏教史学 六（一九五七）。
- 一〇、「旅行の途中他世界に遭遇する物語」考、印仏研 六（一九五八）。
- 一一、神通より来迎へ——インド仏教文学に見られる天界訪問の二方法、印仏研 六（一九五八）。
- 一二、インド仏教文学に現われた他世界訪問譚の性格、上田義文等編「文学における彼岸表象」（一九五九）。
- 一三、インドの仏典に現われた竜と竜宮、東海仏教 五（一九五九）。
- 一四、九分十二分教の基本的性格、東海仏教 六（一九六〇）。
- 一五、原始仏教聖典に現われた授記、印仏研 八（一九六〇）。
- 一六、九分教 *ihvutaka* の原意、東方学論集（一九六三）。
- 一七、仏陀教化の地域について、同朋学報 八・九（一九六二）。
- 一八、無量寿經のアヴァダーナ的性格、結城教授記念論文集（一九六四）。